怨念の日本文化

【幽霊篇】

阿部正路

角川選書 261

角川選書——261

怨念の日本文化　幽霊篇

初版発行●平成七年六月三十日

著者●阿部正路

発行者●角川歴彦

発行所●株式会社角川書店
東京都千代田区富士見二-一三-三　郵便番号一〇二　振替〇〇一三〇-九-一九五二〇八
電話　営業〇三-三八一七-八五二一　編集〇三-三八一七-八四一〇

印刷所●横山印刷株式会社　製本所●株式会社宮田製本所

落丁・乱丁本はご面倒でも小社角川ブック・サービス宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。

©Masamichi Abe 1995／Printed in Japan

ISBN4-04-703261-1 C0339

怨念の日本文化

【幽霊篇】

阿部正路

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

怨念の日本文化　幽霊篇

目　次

幽霊開口　7

第一章　幽霊とは何か　35

一　幽霊と人間の間　37
二　幽霊の〈時〉　38
三　幽霊の季節　40
四　幽霊の姿　44
五　幽霊の〈場〉　48
六　幽霊の目的　51

第二章　幽霊の種々相　59

一　『日本靈異記』の乳房　60
二　『竹取物語』の一基調　69
三　『伊勢物語』の血　76

四　『將門記』の首　95
五　『源氏物語』のもののけ　90
(1)火影／(2)幻の木／(3)夢の浮橋／(4)幻の雲隠れ／(5)透影
(6)六条御息所の生霊・死霊／(7)夕顔の月
六　『今昔物語集』の無言の顔　117
七　『宇治拾遺物語』の炎　123
八　『平家物語』の怨念　127
九　『曾我物語』の御霊　133
十　《仮名草子》の骸骨　139
十一　『雨月物語』の幽霊たち　147
(1)崇徳院の霊／(2)赤穴宗右衛門の霊／(3)勝四郎の妻の霊
(4)秀次一統の霊／(5)真女子の霊／(6)吉備津の釜の髪

第三章　能・歌舞伎の霊　171
一　能の幽霊たち　『船辨慶』の知盛　172

二　歌舞伎の幽霊たち　『四谷怪談』のお岩　184
第四章　近代の幽霊　207
一　足のある幽霊〈三遊亭円朝〉　213
二　眉をかくす幽霊〈泉鏡花〉　232
三　否定された幽霊〈森鷗外〉　240
四　鈴を鳴らす幽霊〈小泉八雲／田中貢太郎〉　244
五　軍隊の幽霊〈新田次郎／三島由紀夫〉　252
六　幽霊のいる場所〈深沢七郎／北杜夫／安部公房／柴田練三郎〉　258
あとがき　266

幽霊開口

二十一世紀は、今や目の前。

まぶしい光と、あやしい影たちが交錯しつづけて来た日本は、今、新しい江戸＝東京時代を招こうとしている。

江戸時代は、室町時代の闇の深さを、いっそう徹底化したといってよく、東京時代は、江戸時代に徹底化した闇を明るく開こうとしながら、江戸時代の闇を地下に埋めて隠蔽しようとした。とりわけ、東京の地下に――。その闇を切り裂くように、東西南北に地下鉄が走る。

地下鉄は、ただ走るだけではない。地上の寺々の墓の下を縫いながら、長い間沈黙を守りつづけた地下の霊たちにつきあたり、あるときは、平将門の悪霊や吉田松陰の怨念につきあたり、弾ける。かの大正十二年（一九二三）九月一日に発生した関東大地震も、日本の長い歴史の中で地下に閉じこめられた怨念の総和の爆発と見てよい。関東大地震は弘仁九年（八一八）九月にも、元慶二年（八七八）にも発生した。更には慶長九年（一六〇四）二月にも、元禄十六年（一七〇三）十二月にも発生した。近くは、平成七年一月の阪神大震災。日本の大都市をめがけて裂ける地球。まさに怨

念は地にひそむといってよい。だからこそ、邪馬台国が初めて歴史に登場する紀元二世紀の初め、卑弥呼時代よりも百年も早い時代から、さかんに地鎮祭が行なわれつづけて来たのではなかったか。古くから地鎮祭が行なわれたことは、佐賀県神崎郡の吉野ケ里遺跡から出土した銅戈が立証する。

天なるや神楽の小野に茅草刈り草刈りばかに鶉を立つも
奥つ国領く君が染屋形黄染の屋形神の門渡る
人魂のさ青なる公がただ独逢へりし雨夜の墓し念ほゆ

これは、『万葉集』巻十六の末尾を結ぶ歌。

「怕しき物の歌、三首」のすべて。作者はわからない。わかるのは、三首目の歌が、雨の降る夜に、墓のまわりに青い人魂があらわれるのを見ていること。結句の「墓し念ほゆ」は「葬りをぞ念ふ」とも訓めるので、その場合は、葬式に、死にきれない人の青い魂が、ふわふわっとただよっていたということになる。日本の文学にあらわれる最初の幽霊といってもよい。ただ、万葉の幽霊に言葉はない。

二首目は、死神が、この世の生者を、黄色く塗った船で迎えにくる歌。あの世（常世）とこの世（現世）の接点は、水平線。『万葉集』では、それを「神の門」とよぶ。門は戸につながる。神の門は、すなわち神戸につながる。阪神大震災は、この世とあの世の接点でおきた震災とも考えること

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

ができる。震源地である淡路島で思いうかぶのは、磤馭慮島。神話では、イザナキ・イザナミの二神がはじめて造った島と伝え、後に日本の国をさす、という。『下学集』では、「日本の総名なり」といい、『古事記』には「矛の末よりしただり落つる塩、かさなりつもりて島となる。これ、磤馭慮島なり」といい、本居宣長の『古事記伝』に、「在二淡路島西南角一小島是也」という説を引く。淡路島とその周辺は、強く国生みの神話につながる。

更には、淡路廃帝。平安遷都後、崇道天皇の号をおくられた早良親王は、平城京時代から平安京時代に移るとき、奈良時代のすべての怨念を凝縮して長岡京時代の謎を深めた。

平安遷都を実現して、平安時代の出発点を示した桓武天皇の同母弟が早良親王。平安遷都以前に、暗く激しい怨念に満ち充ちた十年の長岡京時代があるが、その長岡京を造ろうと提案したのが藤原百川の甥の種継。その種継を、桓武天皇は、造長岡京使の筆頭として起用したのだったが、種継は造営状況を視察中に誰かが射た二本の矢で暗殺されてしまう。平城京からとって返した桓武天皇は、ただちに二名の被疑者を捕えて処刑する。二名の被疑者が真犯人であったかどうかはわからない。

藤原種継暗殺の首謀者は、かつて、早良親王づきの東宮大夫であった大伴家持と見た桓武天皇は、既に、持節征東大将軍として、みちのくの多賀城に赴任中に亡くなっていたのに、家持の官位を剝奪し遺骨を配罪する。まさに、怒りをあらわすに、死者に鞭を打ったのであった。かくして、奈良時代にまで輝いていた大伴氏は、完全に歴史から消える。大伴家の怨念は沈黙、その後、さしたる祟りを見せないのは不思議なほどであった。

早良親王は、皇太子を廃され乙訓寺に幽閉された。親王は抗議して絶食、淡路への配流の途中、衰弱死。死体はそのまま淡路島に送られ、葬られる。そのあと、異変は次々に起る。桓武天皇の生母・高野新笠や皇后・藤原乙牟漏（おとむろ）が亡くなり、皇妃・藤原旅子（百川の娘）も三十歳の若さで亡くなってしまう。早良皇太子の次の皇太子・安殿（あて）親王も病気がちであった。

安殿親王は、のちの第五十一代・平城天皇である。父の桓武天皇が、平城京を廃して、平安京を建てたのに、その子が、平城天皇とよばれることになったのも不自然である。それほど、安殿親王の心は、亡ぼされた古都・平城に傾いていたのである。従って、ほんとうの平安京は、第五十代・桓武天皇の御代に始まったのではなく、一つ置いて、第五十二代・嵯峨天皇の御代から始まったといえる。

暗い怨念に満ち充ちた長岡京の十年。長岡京時代は、短くたちまちのうちに終ったが、つづく千年以上のはなやかな歴史を誇る平安時代に長くつづいたのは、長岡京時代以来、絶えることのない怨念の系譜だったともいえる。追諡（ついし）されたとはいえ、早良親王の怨念は消えることはなかった。同じく追諡されても第三十八代・天智天皇と、第四十代・天武天皇の間に在って、『扶桑略記』や『水鏡』、そして『大日本史』に、天智天皇崩御二日にして皇位を継いだとありながら、『日本書紀』では、ついに天皇扱いでは記されていない大友皇子のように——。漢詩集『懐風藻』（天平勝宝三年〈七五一〉）の巻頭に、大友皇子は、壬申の乱にあい、天命をまっとうすることができなかった。時に、年二十五、とあり、次の五言絶句を見る。

皇明光二日月一　帝徳載二天地一
三才茲泰昌　万国表二臣義一

天智天皇は、まさに、日月の如くに光り輝き、その御聖徳は天地に及んで広大無辺、天と地と人のすべては安らかで盛ん。世界の人びとは続々と来貢して臣下をあらわすという意味で、題して「侍宴」。天智天皇の御即立を祝っての詩で、皇太子・大友皇子は太政大臣に任ぜられた。二十一歳であった。すべてが光り輝き、幸福は永遠に約束されているかのようであった。しかし、比叡山中で悲惨な死を迎える。大友皇子の流れの大伴黒主が、のちに歌舞伎化されて『積雪恋関扉』で皇位をねらう邪悪な山人として憎悪の対象となるのは、大友皇子の怨念の逆転の思想を示すものではなかったか。

皇位を前にして、消えていった多くの皇子たち。大友皇子と同時代の大津皇子、そして長屋王。すべての皇子たちの総和が、火山列島・日本の思想の基本をつらぬく。時には、聖徳太子に示された理想として、また時には消えることのない絶対の怨念として早良皇子に結集されて。阪神大震災の震源地が淡路島であったことも、淡路廃帝・早良皇太子の怨念と、決して無縁ではあるまい。

今に、京都や奈良に、崇道天皇神社や崇道神社として崇拝を集めている。兵庫県竜野市では俗に栄の宮。人びとは、非業の死を遂げた早良皇太子の霊が祟りをなすと信じて、その怨霊を鎮祭するため、延暦十九年（八〇〇）七月、その霊を奉斎したのが、崇道天皇神社である。貞観五年（八六三）五月には、京都神泉苑で、早良皇太子の怨霊を慰めるため、盛大な御霊会が行なわれたのであ

った。

早良皇太子が怨念を深め、暗くした長岡京趾に、今も早良皇太子の怨念の活躍するのが感じられるが、神足神社とその周辺を訪ねてみれば、人影はほとんど見えず、不思議な静けさがただよう。

長岡京の造営中、人びとは、光が天から降りて来て、地面に満ち充ちるのを見て顔をあげようとするが、何ものかに頭をおさえつけられてあげることができない。そこで桓武天皇がその正体を見きわめようとされるが、やはり顔をあげることができない。光は神の足。神の足しか見ることができなかったので、神足神社と称して祀ったのだという。神に足があり、神は足しか見せなかったのである。

江戸時代の、三百年に及ぶ鎖国時代の表面上の静かさは、その実は、怨念そのものの、暗澹きわまりない世界をひたかくしにしようとした静けさであった。

江戸時代の、徳川十五代、二百六十五年に及ぶ幕藩体制の安泰は、室町時代末期の、京都を中心として起った権力抗争の、救いのないすさまじい無間地獄そのままの応仁・文明の大乱（一四六七―七七）に遠く、慶長年間（一五九六―一六一五）のキリシタン処刑の血なまぐさく、より陰惨であった。

その陰惨な一端を今にとどめるのは、越中五箇山の庄川右岸の流人小屋。流人小屋とよぶには、あまりにも悲惨すぎる。独房を一戸建てにしたような小さな牢獄を目の前にして思わず立ちすくんでしまった。御縮小屋である。そこには、陸の孤島の孤絶の世界があった。牢獄は昔のままに残っ

ていたが、牢獄に閉じ込められた人間の姿は、もはやあとかたもなかった。いや、そこには、確かに幽霊が生きていた。萩原朔太郎が、「死なない蛸」と題して詩ったような生き物がいた。

——けれども蛸は死ななかった。彼が消えてしまった後ですらも、尚ほ且つ永遠にそこに生きてゐた。古ぼけた、空つぽの、忘れられた水族館の槽の中で。永遠に——おそらくは幾世紀の間を通じて——或る物すごい欠乏と不満をもつた、人の目に見えない動物が生きて居た。

加賀藩では、庄川の右岸の田向・大島・大崩島・祖山などを流刑地と定めたが、その始まりは、寛文七年（一六六七）八月に、金沢の藩士六人が祖山に送られたのをいい、のちに籠の渡・猪谷・小原なども流刑地に追加され、幕末までに、およそ二百人の流刑者を数えた。

五箇山から更に白川郷に及ぶ道をとおりすぎたのは、流刑者に限ったわけではないが、その道から流刑者の影は消えず、あたかも毛細管のように五箇山を這う。

伊達騒動と並んで有名なのは加賀騒動。お定まりの《お家騒動》だが、加賀騒動（延享年間、一七四四—四八）の中心人物は、大槻伝蔵（一七〇二—四八）。六代藩主・前田吉徳に重く用いられ、側用人のような地位で藩財政をあずかったが、家中の反感を招き、吉徳の死の翌、延享三年（一七四六）、蟄居を命ぜられ、同年、吉徳を継いだ宗辰の急死は伝蔵の毒殺によるとの疑いを生み、重熙の家督相続（一七四七年）後、五箇山の獄舎に幽閉された。やがて、吉徳の側室、真如院との艶

罪が発覚、獄中で自刃。

この事件は、安永九年（一七八〇）に歌舞伎化され、京都の中村猪八座が上演した。「加賀見山廓写本」である。明治になって、新富座が、河竹黙阿弥作の「鏡山錦艶葉」（明治十二年）を上演。つづいて大阪角座が、勝諺蔵作の「再梅鉢金沢評定」（明治十三年）、新富座が「復咲後日梅＝後日の加賀騒動」（明治十四年）を上演した。加賀騒動は、事件そのものの真相究明があいまいにされ、人びとの興味を誘うように劇化されて流行した。

権力継承のための江戸時代の政治は、実に陰険であった。江戸時代に暗くうごめいた人間たち、一見明るそうな江戸時代の人間こそ魑魅魍魎や妖怪たちにまさるところの、したたかで、やりきれない魔ものであった。このやりきれない、暗い、したたかな魔ものであるところの江戸の人間をおびやかしたのが、ほかならぬ江戸の闇に乱舞した魑魅魍魎や妖怪たちなのであった。

かの、江戸は本郷丸山町の本妙寺から出火し、日本橋、深川、本所方面へ延焼、更には、小石川鷹百町の伝通院前から出火し、北は駒込、南は芝まで延焼、三度目には麹町から出火してついには西の丸のみを残して江戸城まで焼きつくした明暦の大火（一六五七年）は、まさに江戸の魑魅魍魎や妖怪たちの燃えさかる乱舞の姿ではなかったか。闇は、常に強烈に炎をよぶものなのだ。

京都は洛外の院の南壬生寺のほとりの叢原火（宗源火）や河内国の姥が火。更には火車や五輪の

かたちにありありと燃える墓の陰火や炎を吐く怪鳥・陰摩羅鬼などを絵画にとどめたのが鳥山石燕（正徳二年〈一七一二〉―天明八年〈一七八八〉）で、その『画図・百鬼夜行』（安永五年春、江戸日本橋、出雲寺和泉掾開、元飯田町、遠州屋弥七版）に、近江国は大津に、飛行する玉のような火について「夜毎に大津辻の地蔵の油をぬすみけるがその者死て魂魄炎となりて今に迷ひの火となれるとぞ」とのべ、京都の、炎につつまれても死にきれないで苦しむ「火前坊」については、「鳥部山の烟たちのぼりて竜門原上に骨をうづまんとする三昧の地よりあやしき形の出たれば……」と説明する。炎につつまれても死にきれないもの。転じて死にきれない炎が幽霊なのだ。不知火や年をとった青鷺は、夜、飛ぶときに青白い火を放ち、田舎道には、耕作に苦しむ百姓たちの臑の火が、狐火のように夜な夜な燃えさかるという。

人は盗人、火は焼亡。という諺にこだわったのが井原西鶴である。この諺は、人を見れば盗人と思え、火を見れば火事と思えというほどの意味で、『本朝二十不孝』の第四番目の「慰み改て咄の点取り――大坂に後世願ひ屋」に引用するが、その西鶴の『諸国ばなし』（貞享二年正月、大坂伏見呉服町心斎橋筋角、池田屋良右衛門開板）に「人はばけもの、世にない物はなし」とある。

西鶴の『諸国ばなし』は、当時の日本の、ほとんど全国にわたる奇談異説を素材とした怪談的短篇説話集であって、五巻五冊本。その第五巻の第六話の「身を捨つる油壺――河内国平岡にありし事」は、不幸な未亡人についてのべたもの。話は、ひとりで世の中を過すことほど、悲しく、つらいことはないとのべて始まる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co